

「氷室」巻頭句一覧

巻頭句〔各号の右の句は氷壺集・左の句は氷室集〕

・・・・・・・・・・・・・・・・

平成9年（1997年）

12月号

みづうみのあけくれ見えて椿の実
かなかなや焚口みえて薪風呂

大阪 中道佐知子
京都 川崎まこと

11月号

振花やこたびは意地を通したし
水中花咲かせて親を拒む子よ

京都 今井 幸
京都 前田 攝子

10月号

涼しさやおくのほそ道自筆本
かなかなや日暮れ色なる明智藪

京都 尾池 葉子
京都 榎本 典子

9月号

蜷の道一掃したる出水かな
夏蝶に長江赤く濁るなり

徳島 明石 司峰
大阪 中道佐知子

8月号

形代は引き潮に乗り隅田川
蒲公英のふまれずにあり無縁塚

京都 尾池 和夫
和歌山 川島美枝子

7月号

少年のごとき眼をして袋角
夜桜や旅籠の廊下入りくんで

京都 富井 康夫
京都 尾池 葉子

6月号

春北風に短き髪の逆巻けり
啓蟄や海へつながる貨物船

京都 尾池 葉子
京都 有岡 巧生

5月号

爆竹や漁師が陸（く）がで酔うてをり
うららかや机に本を積み重ね

和歌山 西（敬介）
京都 前田 攝子

4月号

降る雪にのつぺらぼうの里点し

京都 榎本 典子

五羽六羽七羽そこまで初雀

京都

有岡 巧生

3月号

鴨鍋を近江の人と囲みけり
屋根裏に小窓ひとつや冬の星

京都

吉田みゆき
前田 攝子

2月号

縁に座す尊者の素足十二月
煮大根の小鉢を真中齋の膳

和歌山
京都

市川 誠子
多田芙紀子

1月号

窯出しの右往左往に秋の蜂
筆勢の余りし朱や曼珠沙華

神奈川
京都

村木 道子
榎本 典子

平成10年(1998年)

12月号

過ぎたれば何のことなき厄日かな
望の夜や井戸端に魚籠吊られたる

京都
京都

有岡 巧生
多田芙紀子

11月号

敗戦日掌の空蟬を人に秘す
朝顔の水をもらひに解の子

埼玉
京都

斉藤もとじ
有岡 巧生

10月号

雨来ると鴉揚羽が告げに来る
溝浚へ水新しくなりにけり

京都
京都

今井 幸
今井 幸

9月号

浅草田圃迅うにあらざり半夏生
梅雨晴の空に吊りたる船荷かな

京都
京都

富井 康夫
永山雄一郎

8月号

手を洗ふ水欲しくなり栗の花
あした摘む茶園に伏せて茶摘籠

京都
京都

今井 幸
樹下 淑子

7月号

竿売りが来て豆腐屋が来る日永
亀鳴くやこの世まだまだ面白き

群馬
京都

貝瀬 久代
有岡 巧生

6月号

遠目にもよき紅梅と白梅と
日のあたる川に浸せる桃の枝

神奈川県 服部喜美子
京都 本庄百合子

5月号

軒氷柱おもひおもひの雫して
初午や負はれて眠る狐面

福井 山奥 巖
京都 有岡 巧生

4月号

ちちははの墓に日当る二日かな
振袖に抱かれ破魔矢の鈴の音

大阪 中道佐知子
山梨 沼 ひろお

3月号

山眠る柳生の木太刀細身にて
落柿舎の灰吹その他冬ざるる

大阪 中道佐知子
京都 吉田みゆき

2月号

鳴り物が下手で賑はふ村祭
未決書の山低くなり暮れ迅し

三重 糸川きよし
京都 永山雄一郎

1月号

榎櫃の香庭に木椅子を置きにけり
芒照り山肌すでにけものめく

埼玉 萩原 百代
大阪 中道佐知子

平成11年(1999年)

12月号

秋薔薇病後やさしき手となりぬ
蓑虫に心通はず肘枕

岡山 犬飼 秀哉
京都 有岡 巧生

11月号

畠より人走り出づ大夕立
秋茄子野猿のたのしみわが怒り

和歌山 石井 孝子
京都 井上 康子

10月号

ふりかざす斧ひらひらと子蠶螂
篝火を川にざんぶと鶉飼果つ

三重 糸川きよし
京都 多田英紀子

9月号

どの窓もざんざと梅雨に囲はれて
夏帯や銀座に日暮れ近づきぬ

京都 村上菜々子
京都 尾池 葉子

8月号

沈黙の重なる暑さ原爆碑
あぢさるや神も佛も山の上

京都 古川 邑秋
三重 加島 真琴

7月号

うごくものあつめし中州春霞
巢の鳥の声が濡れゆく夕かな

和歌山 市川 誠子
京都 有岡 巧生

6月号

ひとつ発ちひとつ追ひゆく春の鴨
指笛や春満月のすぐ熟るる

和歌山 市川 誠子
奈良 新藤 公子

5月号

草餅や母の手いつも濡れてゐし
春はまだものうしろにひそみたる

島根 浅津 文子
福井 山奥 巖

4月号

獅子の歯に祝はれし髪やや乱れ
なづな粥吹けば窪みて雨催

京都 尾池 葉子
三重 西村 文代

3月号

とぶやうに七曜過ぎぬ根深汁
何喰はぬ顔して獵師戻り来し

京都 多田芙紀子
京都 前田 攝子

2月号

小径より人現るる良夜かな
魎解いてみづうみ暗くなりにつけり

神奈川 今井 孝子
京都 前田 攝子

1月号

菊師らの車座にとる昼餉かな
秋深し小心者に夜の鳥

京都 松本 節子
群馬 貝瀬 久代

平成12年(2000年)

12月号

敬老日まだ死支度してをらぬ
雁渡し耶蘇名消されし島の墓

長崎 古賀 静江
京都 有岡 巧生

11月号

宿題を山積む子らに秋暑し
ほどほどに疎らに咲いて百日紅

和歌山 市川 誠子
京都 吉田みゆき

10月号

蚊食鳥飛んで夕陽を落しけり
凌霄花や小さき屋根の外厠

埼玉 斉藤もとじ
京都 今井 幸

9月号

仕舞湯を少し沸かして走り梅雨
玉解きし芭蕉やはやも傷を得て

京都 今井 幸
京都 前田 攝子

8月号

田水張る大空の畦わたらんか
連翹のなだれ込んだる鶏舎かな

秋田 茂林 愛子
長崎 間垣マサノ

7月号

鷹の目や選ばれてこそ俳句なり
西東忌借りてさしゆく女傘

京都 尾池 和夫
京都 有岡 巧生

6月号

春燈仏間に母の小さき杖
盆梅や机ちひさき警備室

京都 今井 幸
滋賀 井上美代子

5月号

三月や灯さずはじむ夕炊ぎ
雪舞ふや夜汽車のあかりすぐに消え

和歌山 市川 誠子
島根 長塩 睦子

4月号

大根干す駅に着きたる二輛かな
かいくぐり小舟のゆきき梅白し

京都 尾池 和夫
京都 岸田 明樹

3月号

着ぶくれて沖繩の人お迎へす
棲みふりて虎落笛さへ怪しまず

京都 吉田みゆき
福井 加茂 和己

2月号

待たさるること忘れをり帰り花
ますらをの弱音よろしき蕪蒸

群馬 貝瀬 久代
京都 前田 攝子

1月号

秋の暮一枚づつの戸のぬくみ
鱚雲京に四つの塔残り

群馬 貝瀬 久代
京都 吉田みゆき

平成13年(2001年)

12月号

舟からも鉄を伸ばし松手入
病院の裏門を出る秋の暮

和歌山 西 敬介
滋賀 井上美代子

11月号

山窪の二三戸灯り夜の秋
夕顔の蕾といふは濃むらさき

和歌山 川島美枝子
京都 吉田みゆき

10月号

友は果てわれのその後や長崎忌
牛蛙闇に大穴あけて鳴く

長崎 田口 悠香
三重 山中ひでの

9月号

夏燕故なく父を憶ふ日ぞ
蘭鏝のなまめかしきを掬ひけり

埼玉 斉藤もとじ
京都 有岡 巧生

8月号

老いぬるや神も佛も臙にて
堰あふれしめて卵の花腐しかな

北海道 山 東爺
福岡 森光ゆたか

7月号

凄まじや仔鷹と言へど風切つて
効き足りし鎮痛剤や目借時

北海道 山 東爺
京都 富井 康夫

6月号

プレートの出会ふ地溝の霞かな
前触れもなしに母くる春の暮

京都 尾池 和夫
京都 有岡 巧生

5月号

人を待つ一身棒の如く凍て
はこべらや波郷句稿の紙縫綴

和歌山 市川 誠子
京都 尾池 葉子

4月号

待たさるる受話器に歌留多取りの声
人の死を見届けにきし寒鴉

群馬 貝瀬 久代
京都 有岡 巧生

3月号

狐火と言はれてよりの湖暗し
着ぶくれて鬼の裔とぞ申さるる

福井
京都

加茂 和己
有岡 巧生

2月号

秋うらら埴輪の顔に穴三つ
神渡夕空疾うに滲みをり

京都
京都

村上菜々子
前田 攝子

1月号

秋天や拭きては下がる命綱
内陣の水桶二つ冬を待つ

京都
京都

尾池 葉子
前田 攝子